

〔総合発表会シンポジウムの概要〕

— 九州地域におけるカンキツ産業の今後の展開 —

果樹試験場口之津支場 間苧谷 徹

第55回九州農業研究発表会総合発表会は1992年9月17日13:00~16:00に熊本市総合体育館・青年会館(熊本市出水2丁目7番1号)で開催された。今回は「九州地域におけるカンキツ産業の今後の展開」をテーマに基調講演、シンポジウム(パネルディスカッション)が行われた。好天に恵まれ、約290名の参加者を得て、盛会であった。ここでは14:20~16:00に行われたシンポジウムについてその概要を記す。

1. パネリストと座長

1) パネリスト: 廣瀬和榮(日園連技術主管), 宮本裕(熊本県果樹研究会会長), 久末輝邦(熊本県農業研究センター果樹研究所長), 岸野 功(長崎県果樹試験場次長), 田中 享(九州農政局蚕糸園芸課長)

2) 座長: 波多野 洋(九州地区果樹試験場長会長)

2. パネリストからの提言

1) 廣瀬氏: 我が国の中で農業が生き残れる地域として九州があり、果樹は九州農業の一翼を担うことになるであろう。九州には土壤条件の異なる様々な地域がある。また北と南とでは気象条件も大きく異なっており、多様な品種を作ることが可能であるという特色を持っている。ただ、他の地域で栽培している品種・システムを安易に導入し失敗した例が多い。自分の土地に適合した品種・システムを探して欲しい。今後、果樹作りに成功するためには土地等の資金力及び技術力に加え精神的豊かさが必要である。

九州果樹の進展を図るためには、強風害及び潮風害に強い品種の探索と育成が重要である。さらに、日中の気温が極めて高温になることから、高温域の研究も推進して欲しい。

2) 宮本氏: ハウス栽培1町4反, 屋根掛け1反半, 露地栽培1町4反を我々夫婦と長男夫婦の計4人で経営している。量の時代から質の時代になり、従来の栽培技術では質への対応は困難であり、様々な工夫が必要になっている。そこで、まず、労働分散を図るためハウスの加温開始時期を変えて8ブロックに分けた結果、初出荷の4月25日から9月25日まで収穫・出荷時期をずらすことができ、家族労働だけで経営することが可能となった。一方、露地ミカンも園地改造を3年間かけて行い、運搬者が園地内に入ることを可能にするるとともに、SSを導入した。さらに、以下の試みを合せ行った。①ハウス栽培と露地栽培とで合計10ブロックに分け、早い作型の時から試験(工夫)を行い、その結果を次の作型に生かす。すなわち、1年で10年分の工夫をする。②「金峰」は極めて高品質であるが隔年結果性が強い等の栽培面

欠点があるが、作りこなす工夫をする。③徹底した客土を行う。④高畝栽培, マルチ栽培を導入する。⑤肥料資材の改善を行う(化学肥料を抑え、魚・肉を肥料として使用)。⑥高接ぎ方法の改善を行う(高接ぎの翌年に反当たり4~5トンを収穫)。⑦経営面積の1割は改植, 新品種の高接ぎなどに使い、時代に遅れない工夫をする, など。

以上、果樹農業は工夫と努力により高収入を上げることができ、楽しい有意義な職業だと思っている。

3) 久末氏: 九州の温暖・多雨という気象条件は生育を促進するという利点がある反面、病虫害が多いという欠点もあり、このような中でカンキツ栽培が行われてきた。また、九州は大消費地にも遠いというハンディを背負いながらも全カンキツ生産量の4割を占めるに至っている。熊本県は10年前と比較すると栽培面積は33%減少したが、これは園地再編整備事業が進められた時、不適地が脱落し、経営面積の小さい農家が栽培を放棄したためであり、現在は適地で技術レベルの高い農家が生き残っている。熊本県のカンキツで問題なのは、極早生の中でメインにする品種が決まらないまま現在に至っていること、極早生の比率が低いことである。早い時期の露地ミカンは極早生が引っぱっていることもあり、極早生の比率が低いことは農家経営に影響を与えている。次にハウスマシカンの普及率の低いことがあげられる。ハウスマシカンは露地ミカンと比較して、1日当たりの労働所得では大差あると思えないが、作型を変えることにより、労働分散に役立っている。今後、熊本県のカンキツ農業を発展させるためには、①立地にあった優れた品種を導入すること、特に極早生をどう取り戻すか。県南の中晩生カンキツ地帯に適した品種の育成を心掛ける。②マルチ栽培, 高畝栽培等の技術の確立を図る。③ハウス栽培には限度もあるが、加温でなくても簡易ビニール被覆でも品質が向上し、生産が安定する品種もあるので、これらの技術の確立を図る。④農家単位ではなく、産地単位で個性ある品種の住み分けをする。⑤土地基盤整備を早く行う。大がかりなものではなく、農家の手作りでやれる基盤整備のほうが安価にできる。これにより労働生産性が上がり、品質の向上を図ることができる。

4) 岸野氏: 農産物の自由化に対応するために、緊急技術開発が行われた。その目的の一つは高品質化であった。高品質化の方法として施設費が余りかからないマルチ栽培が増加した。長崎県では面積の15%程度のマルチ栽培が計画されており、今後、さらに面積は増加するも

のと思われる。この栽培の問題として果実の減酸対策があるが、これは目途がつきそうである。この栽培が普及すると差別化商品にならなくなり、マルチ栽培の高度化、すなわち、長期間マルチして灌水による品質調節を行う技術へと発展する可能性がある。さらに、一部生産者の間では表層根を増加させ、樹に水分ストレスをかけ、高糖度果実生産を図る栽培が行われている。

今後の技術開発の方向としては、生産者の高齢化や後継者不在への対応がある。そのための方策として機械化による省力化がある。このための基盤整備法として、最近、弱樹勢系統が多くなっていることを考慮して、畑幅2m、作業道2m、段高60cmの階段畑を基本的な開園法と考えている。この開園法は傾斜度15度くらいまでの傾斜地に利用できる。

収穫労力の分散手段として、9月から3月まで収穫できる品種・系統の組合せを行うことである。品種の多様化は小量多品目の消費動向に適合しており、九州の温暖な気象条件を活用する有効な手段である。温州ミカンのみで収穫労力の分散を図るためには1～3月に収穫する樹上完熟を取り入れるのも一法である。

温州みかんは、高齢樹に極めて偏った樹齢構成になっているから、これからは改植が進むと予想される。改植は同時に園地改造もできるから利点が多い。改植の際、無収入期間を短縮する技術の開発は今後の産地育成と産地強化に極めて重要な課題である。改植用の苗木育成法として、コンテナを利用した容器育苗を考えている。容器育苗中に1回収穫し、その後定植すれば無収入期間は全くなくなる。容器育苗は自動灌水・液肥の自動注入等による管理の省力化と生育促進を図る技術の確立が必要と思われる。

5) 田中氏：高齢化、後継者不足が顕在化し、労働力不足が深刻化している。このような状況下で、安全な高品質果実を計画的に供給する必要があり、その中で地域の特長を生かした果実を生産し、ブランド化を図り、農家の経営安定を図ることが重要である。ここでは行政的な資料に基づいて、カンキツ産業の今後の展開について述べてみたい。

①最近の温州ミカンの需給動向

1990年の果実輸入量は140万tで、国内消費量の18%に相当する。温州ミカンの栽培面積は1973年の17万3千haをピークに減少し、'91年は7万8千haに、生産量は1975年の36万tをピークに減少し、'91年は157万tになり、需給均衡状態にある。九州における1991年度の温州ミカンの価格は、生産費が95.89円、販売価格が123.49円で、初めて販売価格が生産費を上回った。これは生産量が減少したこと、高品質果実を生産したためである。ハウスミカンは生産量が増加したため、価格は低下した。

②生産面における高品質・高付加価値化の現状

1991年の太田市場における「わけありミカン」は140種類、九州に90種類あり、中晩生カンキツには16プラン

ドあった。「わけありミカン」を分類すると品種の違いによるもの、立地条件の違いによるもの、栽培方法の違いによるもの、収穫方法（完熟等）の違いによるものがある。

③加工面における高付加価値化の現状

ブラジル等から安い果汁が入っており、これに対応するため、九州の6県においてジュース工場を設置し、絞りたてジュースを用い凍結濃縮、ストレートジュース、減酸処理等を行い商品化を図っているが、価格面で苦戦している。このため、果実以外に野菜を絞ったり、依託加工したりして経営の安定を図っている。

④高付加価値化等に関する行政施策

1993年度予算要求の中に、高品質果実生産のために「高度品質管理体制確立推進事業」、「農業改良資金制度」が含まれている。

⑤今後の課題

高齢化、後継者不足が進む中で、今後の課題として、農道の整備とこれに見合った機械化技術の確立、さらにミカンの高樹齢化対策（31～35生樹の生産量を100とすると、41年生樹ではその83%。1975年以降は新植を抑制したため、41年生以上のものが多い）、標準規格の見直し、使用していない出荷場の効率的利用等があげられる。

3. 討議の概要

①質問：熊本県は中晩生カンキツに力を入れているが輸入オレンジ、グレープフルーツと競合して大変だと思うが、熊本県は中晩生カンキツの取り組みを今後どのように推進していくのか。

久末氏：熊本県の中晩生カンキツの中心は甘ナツであり、不適地を中心に面積を半分減らした。「清見」、熊本原産の「河内晩生柑」等、産地に適した品種を導入し、産地の振興を図って行きたい。

②質問：九州のイメージが生かした中晩生カンキツの取り組みについて

廣瀬氏：収穫労力のピークが過ぎた1月以降に収穫できる耐寒力のある品種の育成と栽培技術の確立を図る必要がある。特に、4月末からの連休と、7月中旬の新盆の贈答用の需要ピークに出荷できる体制をとることが重要である。連休には従来、甘ナツをあてていたが、それ以上の品質の品種・系統を考える必要がある。年を越す栽培は、温暖な九州の気象条件を生かした最も有利な方策である。

③質問：宮本さんはハウス栽培を1町4反しておられるとか、自家労力だけでやれるのか。

宮本氏：スイカ作りに比べるとハウスミカン栽培は楽である。防除も煙霧器で夜間に自動的に行っている。ただ、玉つりに労力がかかるが熟練を要するため素人では難しく、できるだけ自分達でやっている。要はハウスをやるといふ決断が重要であり、決断こそ最高の技術と思っている。

④質問：水田では基盤整備が進んでいるがカンキツで

は何故遅れているのか。

田中氏：基盤整備事業は申請方式であり、農政局が指導して行っているのではない。県を通して申請し、面積規模等の条件がクリアできれば予算の範囲で実施できる。

4. 討議のまとめ

「九州地域におけるカンキツ産業の今後の展開」につ

いて5人の方々から有為な意見をいただいた。今回は、このテーマについて一つの結論を導くためのものではなく、将来への指示として受け取り、本日の検討結果を持ち帰り、これをさらに発展させていただくようお願いしたい。